

[様式 11]

(対象事業：展覧会事業等支援)

事業名：高取焼 古高取と遠州高取

事業者名：(財) 根津美術館

連携事業館名：福岡市美術館

住所：東京都港区南青山 6-5-1

TEL：03-3400-2536

FAX：03-3400-2436

HP アドレス：www.nezu-muse.or.jp



施設概要

昭和 15 年、初代根津嘉一郎によって、その収集品をもとに創立され、翌昭和 16 年に開館した東洋古美術の美術館。蔵品の内容は多岐にわたっているが、根幹となっているのは、仏教美術と茶の湯道具である。あわせて古代中国の青銅器群も著名である。

事業の意図目的

高取焼は、唐津、上野とともに九州陶の一つで、特に茶の湯道具を産したことで知られている。しかしながら、これまでまとまった研究がほとんどなく、その全体像がどのようなものであるのか、あまり知られてこなかった。本展覧会は、高取焼をまとまった形で紹介するはじめての機会とする。会場も、生産地である福岡だけでなく、消費地である東京でも行ない、そのすぐれた造形と技術を広く紹介する。

事業概要

高取焼の展覧会を開催し、それに付随する形で展覧会図録を作成する。

展示作品は、高取焼のなかでも、初期とされる内ヶ磯窯と、大名茶人である小堀遠州の指導を受けたといわれる白旗山窯の作品を中心として、江戸時代前期の高取焼を、伝世の優品を中心に紹介する。初期高取焼といわれる織部風の高取焼が、遠州好みといわれる瀟洒な作風へと展開していく様子を様子を伝えていく。さらに図録では、窯の経営が、江戸時代の黒田藩にとってどのような意味をもっていたのか、産業としての高取焼の変遷を知る機会としたい。

また、会期中は高取焼に関する講演会と研究会を開催する。講演会・研究会共に研究者も一般の方も一緒に聴講していただき、陶磁研究の最前線に触れていただく。

その他、東京会場では、高取焼の窯址から出土した陶片や、江戸時代の一大消費地である京都市内で発掘された高取焼の陶片など、出土資料をあわせて展示し、高取焼の生産活動の理解の一助とする。さらに、これらをまとめて紹介したリーフレットを制作し、配付する。

事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト ワークシート その他(ポスター、チラシ、リーフレット)

作成した報告書等

ビデオ ()

冊子 (高取焼出土資料 内ヶ磯窯址・白旗山窯址・京都市内遺跡)

その他 ()

参加者状況

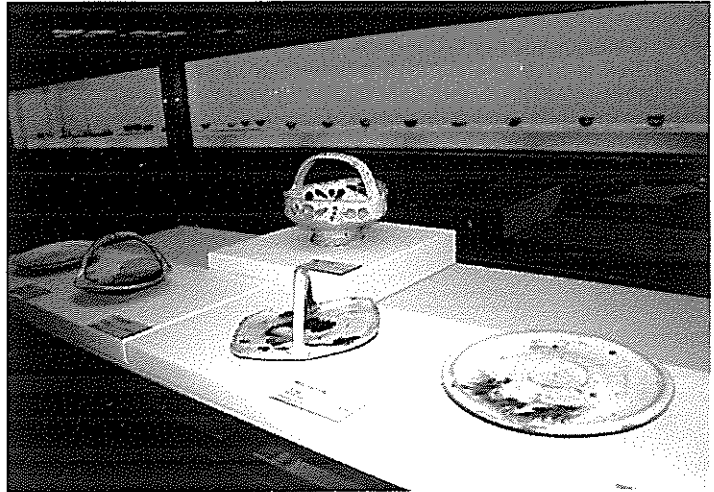
参加者人数 延べ 8,298 人

内訳 一般 5,371 人、学生 296 人、一般団体 325 人、学生団体 49 人、招待者 557 人、特別観覧 1,207 人、友の会 322 人、その他 171 人

(1) 事業の実施状況

「高取焼 古高取と遠州高取」展は、福岡市美術館で当初企画されたものを、東京でも開催することとなった展覧会である。

高取焼を黒田藩の大切な産業としてだけでなく、その初期にあつては西国の藩を中央と繋ぐ大切な道具であつたことが説かれ、作品によってそれを語らせている。ことに内ヶ磯窯と白旗山窯という窯の製品に絞って展覧会を構成することにより、織部風の歪みの多いうつわから、遠州好みの瀟洒な姿に華麗な釉調のものがみられ、その展開を明らかにすることができる展覧会となった。



挿図 1：作品展示風景

高取焼は、九州では地元の産業の一つとして馴染みのあるやきものであるが、全国的にみると、やきものの豊富な九州陶のひとつとして、名前を知るのみ、もしくは茶道を学んだことのある人なら、遠州好みのやきものとして認識されているにすぎない。これまでも、高取焼は周辺の唐津や上野焼など九州陶のなかで語られてきたようである。平成に入って窯址の発掘調査が行われ、研究者の間では少しずつ注目されはじめた高取焼であるが、これまでまとまって紹介される機会もないままであった。今展覧会では、地元のやきものとして長年研究に取り組んでこられた福岡市美術館の企画展として発足し、共催館として当館が協力し、東京会場として開催する巡回展となった。

出陳作品は、伝世の高取焼から優品が選ばれ、茶入、花生、水指、向付といった茶の湯で用いられるうつわによって構成した。作品の所蔵先は、企画の発端となった福岡市美術館の所蔵品のほか、田中丸コレクションなど福岡県を中心とする美術館、博物館、個人所蔵の作品と、都内をはじめとする九州以外の所蔵先の伝世品がほぼ同数となった。これは、高取焼の地元である九州に優れた作品が蔵されている恵まれた状況があるとともに、巡回展となったため大規模に国内の伝世品を集めることが可能となった結果である。

さらに、東京会場である当館では、伝世の高取焼に対する理解を深めるために、生産地をすぐ傍にひかえている福岡市では必要とならなかった内ヶ磯窯址、白旗山窯址などからの出土陶片と、当時の一大消費地の一つである京都市内出土の資料を陳列することができた。紹介された陶片数は展示作品とほぼ同数の約 200 点。展示された伝世品に共通する点がみられることを前提に、窯道具など窯での制作の仕方がよく分かるものや、完形品である伝世品ではみることのできない器物の内部構造や土の色など材料がよく分かる陶片、作品が作られた時代の消費地での動向がよく分かる京都市内の出土資料を選んで展示した。

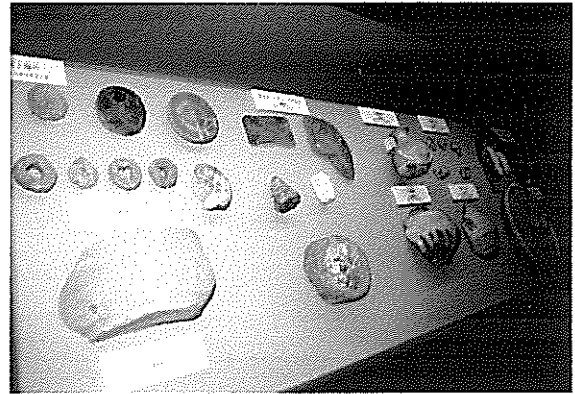
展覧会は、平成 17 年 9 月 15 日から 10 月 30 日まで福岡市美術館で開催され、その後東京会場として当館で 11 月 12 日から 12 月 11 日まで開催された。期間中、東京会場での観客動員は 8,298 人だった。

会期中は、展覧会を企画した福岡市美術館学芸課長の尾崎直人氏による講演会を行なったほか、一般入館者を対象とした公開研究会として、尾崎氏の他、九州陶磁文化館の大橋康二氏、茶道遠州流宗家の小堀宗慶氏を招いて開催することができた。

成果物としては、福岡市美術館の編集制作によって展覧会図録を作成したほか、芸術拠点形成事業の助成により、当館でもオールカラー図版のリーフレット『高取焼出土資料 内ヶ磯窯址・白旗山窯址・京都市内遺跡』を加えて制作することができた。

そのほか、広報物としてポスター、チラシ、展示目録、館内ロビー用看板を作成した。

芸術拠点形成事業の助成にかかる事業として、申請時には展覧会の企画自体は動き出していたため、福岡会場での展示を含めた展覧会事業全体の予算に対する助成をお願いすることはできなかったが、共催館として参加した当館の取り組みに対して助成を受けることができた。その結果、単なる巡回展の開催先となるのみならず、展覧会の企画に対して、会場のもつ特色を活かした取り組みを付加した形で展覧会を提示することができた。



挿図 2：陶片資料展示風景

(2) 地域との連携について

地域との連携については、今展覧会では二つの連携があったように思われる。

一つは、高取焼の地元である福岡の協力である。共催館として活動した福岡市美術館を中心とした福岡周辺の美術館や博物館の協力と、芸術拠点形成事業の助成によって実現した根津での高取焼出土陶片の陳列にかかる、福岡県の埋蔵文化財センターや教育委員会など考古関係の施設の協力である。

展覧会の開催に際して、出品作品の選出は、長年にわたり高取焼を研究してきた福岡市美術館学芸部長の尾崎氏を中心に、伝世している高取焼の優品を中心に構成した。関東、中部、関西等の作品の出陳については当館も協力したが、福岡県を中心とする九州一帯の美術館、博物館、個人からの出陳に関しては、同館の地域に根ざした長年の調査研究活動によるネットワークの構築、作品の発掘によった。その結果として、同館では地元福岡市近郊のやきものである高取焼を、九州一帯の所蔵作品とその他の各地に所蔵されている作品がほぼ半数ずつになるような構成で、国内の優品を一堂に集めて展示する機会となり、当館では、九州陶の一つとして知られているに止まっている高取焼について、東京ではみる機会の少ない地元九州の所蔵先からの作品を多数交えて概観する、貴重な機会となった。

また、当館では伝世の高取焼に対するより深い理解を促すために、窯址からの出土陶片や、当時の一大消費地の一つである京都市内からの出土陶片の展示を加えて、展覧会のもう一つの柱とした。これら出土陶片の展示は、地元福岡では近隣の資料館、埋蔵文化財センターでみる事が可能なため、福岡会場では特に必要がなかった。しかし、高取焼の伝世品にすら馴染みのない東京では、窯址出土資料という生産地からの直接的な資料や、当時の消費地での動向を知る手がかりとなる京都市内出土陶片は、伝世品の説明機能を補強する資料として大いに役に立った。資料の紹介の労をとられたり、出陳を快諾して下さった諸機関の協力は、地域の産業に対する理解を、東京のような遠隔地で広めるための活動として、非常に重要で有効な役割を果たした。このように、特定地域の産業に基づいた文化財の展覧会を行なうことは、関係する地域との連携、協力による成果だと思われる。

二つめは、当館のある東京での地域活動で特筆する点として、研究会の開催がある。パネラーとして、九州から福岡市美術館の尾崎氏をはじめ九州陶磁文化館の大橋康二氏、茶道遠州流宗家の小堀宗慶氏をお願いした。これは、研究者を対象とした研究会や学会では珍しいことではないかもしれないが、九州で活躍されている第一線の研究者の話を、東京で一般の人々が直接聞くことができた貴重な機会であり、また茶道の宗家という立場から、長年作品に触れてきた方との対話がもたれた機会でもあった。

さらに、生産地の関係者に、高取焼が全国的に関心を集めたことで、新たな研究、展示の機会を促進することとなったのは、意義あることだった。

(3) 成果物について

すでに(1)でふれたように、展覧会図録に付け加えて、東京会場で展示した高取焼の出土陶片資料の写真をオールカラーで収録したリーフレットを制作した。展覧会図録は、伝世品の解説と高取焼の総論、年表を中心とした構成である。出土陶片の資料は、図録のなかに反映させることが難しかった事情もあり、また陶片資料の展示を必要としているのは、東京会場のみと考えられたことなどから、リーフレットという形で制作し、無料で頒布することとした。これは、当初生産地から遠く離れた東京の観覧者を念頭において制作したものだが、結果的に生産地に近い九州および京都の陶磁研究者にも活用されているようである。

(4) 参加者の反応について

展覧会期間中の観覧者からは、以下のような質問や声がきかれた。

- ・ これまで唐津や上野といわれていた作品も、高取焼として展示されている。なぜなのか分からなかったが、作品とあわせて陶片資料をみることができたので、納得できた。
- ・ 点数が多く、圧倒された。
- ・ 高取焼がどのようなものか、あまり知らなかったが、色々なものを作っていることがわかった。
- ・ 高取焼について基本的なところがわかった。内ヶ磯窯、白旗山窯以前の高取焼や、白旗山窯以降の高取焼の展開について興味が湧いた。

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

今展覧会では、地域との連携を目的とした展覧会事業として、芸術拠点形成事業の助成を受けた。高取焼という九州の陶磁器を概観する展覧会を、生産地に近い福岡で行なうことは、地域文化への理解を深め、文化を活性化させるといった重要な働きがある。さらに、それを東京で行なうことは、地域の文化をより広く発信する機会となる。しかしながら、その地域の文化に初めて触れる人々が多い地域では、地元での展覧会において提示されたものをそのまま展示したのでは、ややもすると説明不足となる可能性がある。展覧会を自分たちなりに消化したうえで、会場の一つである自館なりの見せ方、自館を取り巻く地理的、文化的な状況に展覧会を適応させるために必要な内容を盛り込もうとする試みが、必要になることもあるように思われた。今回は、それを芸術拠点形成事業による補助が可能にしてくれたように思う。巡回展の会場として、展覧会を受け入れる準備と並行して、自館での展示にあわせた調査、出陳交渉、集荷、出版物の作成などほぼ展覧会一回分に近い仕事をして受け入れることが可能だったのは、繰り返すが芸術拠点形成事業のお陰である。